



パピルスの穂 谷村志穂

アフリカをはじめて旅したときに、その土地の風がさらさらとして、樹木の葉を柔らかく動かすことに、とても驚いたのを憶えている。

ある朝、地元のガイドが私をホテルの裏庭のような場所へと案内してくれた。灌木の林を、私は彼の後についていった。彼はたぶんきれいな英語を話していたと思いつのだが、当時の私にはよく理解できず、草や樹木や池のことを一つ一つ案内してくれる音が、ただリズムを伴った音楽のように聞こえていたものだ。

遠くの池ではカバたちが水浴びしており、たぶんガイドの男は、「ヒポはとても危険な動物だから、静かに通り抜けるように」というようなことを言っていたはずなのに、私は立ち止まって、幾度も

写真を撮った。

もついい。

男がそう思ったかどうかは知らないが、旅先では、話し相手の心がそうやってふっと遠ざかる瞬間を感じ取ることがある。

話しても通じない。

早朝のガイドは、カバの池を通り過ぎてからは急に無口になり、その褐色の乾いた手で草を摘みでは、鼻歌まじりに散歩し始めたのだが、急に立ち止まった。「この草は何か知っているか?」と、穂先が大きくひらいた背丈ほどの草を手私に聞いてきた。

「ノー、知らない」と、首を横に振ると、「これがパピルスだよ」と、彼は言った。パピルスの発音を何度か言い直したが、私にはその時点でも、よく理解できなかった。

「わかるだろう? パピルスだよ。これがパピルスなんだよ。オリジンなんだ。本当にわからないのか?」と、いつようなことを、彼は繰り返し、草の太い茎を割って見せてくれた。

それでも私にはまだ意味がよくわからなかった。大麻でも見せられているのかと思っただ、それでもないらしい。もついい。



谷村志穂(たにむら・しほ) 1962年北海道生まれ。北海道大学農学部卒業。出版社勤務を経てフリーライターになる。90年に発表した『結婚しない!かもしれない!症候群』は、大きな話題になり、以後コンスタントに作品を発表し続ける。08年『海猫』で第10回島崎雪村文学賞を受賞する。最新刊は『日の月』。

と、彼がふたたび思っ歩き出すだろうと待っていたが、そのときには珍しく男はその場を動かなかった。ジーンズのポケットに突っ込んであったメモ用紙の束を手にとると、それで必死に書く真似をした。いや、実際にその紙にはすでに色々なメモがあった。水彩の絵で、草や樹木が無数にスケッチされていた。

「パ・ピ・ル・ス?」と、男の音をゆっくりなぞったときに、私はようやく気がついたのだ。それが、紙のはじまりになった草であることを。

その草の穂は、上に向かって伸びる細い糸のようで、朝の光に反射して輝いていた。褐色の手で握られ、風に揺られてそよいでいた。太古の時代には、その茎の髄の部分を取り出して、編んで用いたと後で知った。

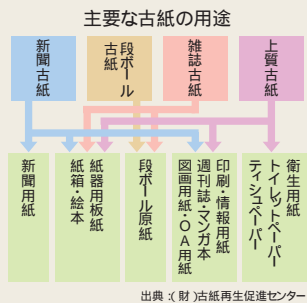
もついい は、寂しいものだ。それからの私は、旅するたびに思っている。

PAPER Q&A Vol.12

Q. 古紙を分別するのはどうですか?

A. 古紙の種類によって、それぞれ違う用途の紙に再生されるからです。

右の図のように古紙の種類によってリサイクルされる紙が違うことをご存知でしたか? 古紙は、新しい紙につくり直すことのできる大切な資源ですが、種類の異なる古紙を混ぜてしまうと良質な再生紙をつくることができません。また、リサイクルの妨げとなる粘着物のついた封筒や感熱紙などは除く必要があります。引き続き、分別回収へのご理解・ご協力をお願いします。



今回は5月・12日号、角田光代さんです。

提供 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>

東京都庭園美術館内
カフェ・デ・ザルチストにて